

告に駆けつけたソ連の監督は「ハローシー、エンジニエル」と満足していた。この工事により、日本人の技術にびっくりした様子であった。

そして、昭和二十三年九月六日、樺太の真岡を出帆し、新興丸にて函館港に上陸し、引揚援護局にて帰郷旅費四百五十円と未支給前渡金五百円也と特配購入切符引換券を受け取り、船で青森港着、汽車により六年前に北方へ向かった東北線を今度は東京へ向かって南下する事となり、車中の人となる。宮城県通過中に、米をかついだ人たちがたくさん乗車して、東京近くになったとき列車が徐行し、窓からその米を外に投げ出しているのを見て、びっくりした。ヤミ米の運搬だと後で知った。東京で一泊し翌日我が家に着く、迎えに来てくれた父の顔が大変に印象に残っている。うれしかった。

帰国後は農業に従事し現在に至る。

抑留生活のかすかな記憶

福井県 石川 好廣

大正十四（一九二五）年三月二十一日生まれ

今立郡今立町大滝

昭和十四（一九三九）年三月二十四日

岡本尋常高等小学校卒業

昭和十八年一月まで

家業の和紙製紙業に従事

昭和十八年一月二十六日

大阪陸軍造兵廠に軍属として従事、二十年二月

一日まで

昭和二十年二月十日

徴兵により高射兵として舞鶴市東部〇〇部隊に入隊

入隊

昭和二十年二月十三日

現地教育のため満州に出発

昭和二十年二月十五日

満州三七七四部隊（新京（長春）郊外）に入隊

昭和二十年六月一日

満州第六一六部隊へ転属

当時受領した軍装（満州に向け出発の装備左の通り）

帯剣、飯盒は代品として柳行李

編上靴の代品としてズック靴

背のうの代品としてリュック等が支給

昭和二十年八月十五日

満州新京市内の陣地で終戦を知りました。

厳しい軍隊の規律より解放され、自由の身となった喜び、その反面今後の進路に対する不安が入り乱れ、複雑な思いでした。

昭和二十年八月十七日

武装解除、一部の兵器、高射砲その他のみ。

昭和二十年八月十八日

公主嶺に集結命令、そして夕方、新京市内を出発。

途中旧満軍による襲撃に出遭う。そして戦闘約二時間に及ぶ。敵は撃退したが、この戦いで我が方に三人の尊い戦死者を出した。

当時我が方の兵器は高射機関砲二門、そして重機関銃一丁と小銃約三十丁で応戦した。

昭和二十年八月二十日

武装解除。兵は丸裸となったが、将校の帯刀だけは許可された。

昭和二十年九月二十日

入ソ、ブラゴエ。

昭和二十年九月二十六日

ブラゴエ出発、ウラジオ経由で東京ダモイ（帰国）にだまされて出発。そして至るところで時計や万年筆等が歩哨に没収された。

車中の食事は、コウリヤンと燕麦等の混合雑炊が飯ごうのふたに一杯、それが朝夕の二回のみでした。若い私たちには腹が減ったまらない。それで最後の時にと誰しも満州を出るとき綿軍足に白米を詰めて隠し持ってきたものを少しずつ出し

て生かじりして空腹を耐えた。

昭和二十年十月十八日

目的地に到着。

二十二日間の箱詰め列車の旅でした。この輸送中、三人の死者が出た。

到着地ウズベキスタン—アングレン、首都のタシケント市よりさらに山奥に入ったところでした。

しかしこの地は極寒地でないことがわかり、一同皆ほっと胸をなで下ろして喜んだ。

作業（ラボータ）

最初の一年間は河原より大小の石を建設現場に運ぶことでした。その作業の往復にはマンドリン銃を肩にかけた若い十九〜二十歳くらいの兵隊（サルダート）がついていた。

石を運ぶのに、もっこにのせて前後二人一組で、または一人で適当な石を一個肩に担いで運びました。

最初厳しくつきまとった警戒兵も、一カ年を過

ぎるころより手薄となって、日本人の監督（カマンジール）に任せられるようになった。

土地の状況

アングレン地区での収容所は一単位二千人で、五つあって一万人が収容されていると聞きました。

この土地は中央アジアに面しているからか、夏は相当暑く水の補給には大変だった。個人的にはその周辺の濁水を煮沸して飲料とした。ただし食堂で使用する水は河川の上流からタンク車で運んでいた。それだから量的には制限されていた。

また、この地方特有の天候として、四月下旬頃よりほとんど雨が降らない。晴天続きで、山野一面、草木は全部枯れて、はげ山同然となる。

洞窟内の環境

どこの収容所でも同じだったろうが、シラミは人から人へと媒介されて、昼でも夜でも被服、特にふんどしの縫い目に住みついて、あの辺をやられると困る。寒い時でも体温が上昇するような気

がした。痛がゆい、かかずにおられない。また、かけばかくほど……本当に困った。

また、私たちが住む収容所の洞窟にも南京虫の古巢があり、木の割れ目いっぱいに住みついていた。消灯時間を待って就寝者の顔の上に落ちてくる。そしてほおや首筋に吸血する。痛がゆい、気がついて手をやると、その指にねっとりとした血がついてくる。やられた。後の祭りである。南京虫は既にそのころには狭い木の割れ目に逃げ隠れている。そんな毎日毎夜であった。そこで考えたのが建物の外で寝ることである。雨が降らない、夜露もおりない、また高原地帯で蚊もいない。条件のそろった絶好の避難場所である。だれ言うことなく皆毛布一枚持って、話の合う者同士が輪になって寝つくまで語り合う。

冬の日には短いが夏の夜は長い、屋外で八時ごろまで新聞等が読める明るさである。

日本の故郷で拝したお月さまと異なり、月も星も明るく大きい。まるでおとぎ話じゃないが竹ざ

おの長い棒なら届くような錯覚でした。このお月さまを眺め、皆面々に念願こめて拝していた。

内地でも同じこの月を拝して、私たちが無事で一日も早く帰れることを祈っているだろうと思ひ、心やるせない気がした。

ノルマ

入ソ以来よく働いた者（ハラシヨラポータ）から日本へ早く帰すとだまされ続けてきた。

作業に対するノルマは特に厳しかった。作業班の中で病気その他の用件で欠席したときには、その人の分も全うさせられた。また病気として体温三八度以上、負傷でも外傷がなければ休養させてくれず、本当に困った。敗戦兵士の情けなさをしみじみ感じた。

食事関係

朝はロシア黒パン一枚約三〇〇グラムとスープが飯ごうのふたに一杯。

昼は燕麦またはコウリヤンのお粥（ドロドロ）が飯ごうのふたに一杯。

夜は湯飲み茶わん一杯くらいの混合飯と副食品としてトマトの漬物。

満腹感を味わったことは一度も無く、いつもひもじい思いの毎日でした。話によると、他の収容所の方々は作業現場で木の実や山菜等を取って生で食べたり、または茹でて食べた、そして空き腹の足しにしたと聞きましたが、私たちの作業場では、春先一時的に山一面に赤い花をつけたケシや、名も知らない雑草の色とりどりの花をつけた美しい光景を見るのもつかの間、晴天続きで雨の降らないこの地方では、皆枯れて何一つ育たないはげ山でした。

そのような状態だから、ただ配給に頼る外はなかった。また支給される副食にバレイシヨ等はほとんどなく、野生の菜っ葉くらいが時折スープ上に浮いている。ただし酸っぱい青いトマトの塩漬は毎日のように支給された。この酸っぱいのがビタミンがたくさん含まれているからと言われたが、栄養失調や夜盲症が続発した。私も御多分に

漏れず夜盲症にかかり、四カ月ほどは夕方になると階段の段差等がわからずつまずいたり、または引き戸の持ち手がはつきりせずもたもたする等で苦勞した。

私達の宿舎（建物）は半地下の仮施設で上下二段の木製ベッドでした。一棟に五〇〇人収容され、暖房は中央に一個で、たく材料は石炭でしたが、質が悪くて、まるで内地の豆炭くらいの火力しか無く、室内は寒くて、ひざを抱え込んで睡眠を取るが、寝つきが悪く苦勞しました。

ラーゲリー中の娯樂

大勢の中には手の器用な者がいた。暇を見て花歌留多等を幾組も作って各班に分配した。休日等は何人か一組で花歌留多や数合わせ等、おいちよかぶなど、笑声高らかに楽しんでた。ただし、かけごと等は一切しなかった。

民主化運動

ハバロフスク方面で数カ月共產主義教育を受けた若い青年たちが私たちの宿舎に来て、半強制的

に毎夜洗脳教育が行われた。

彼らは過去の日本の教育は全部民主主義に対して反動であることを強調していた。私たちは昼の労働で疲れていて半分ぐらいは居眠りしていたように思う。そして、何を言うのだ、君たちはソ連の共産主義思想に洗脳されて、ソ連の言うことは何でも正しいと言うが、などと私たちがもし反対すれば反動分子としてたちまち吊るし上げられるから、表向きはそうだそうだと同調していた。

ところが、昭和二十二年春頃だった、ラーゲルに一大変化が起きた。

名前は忘れたが若い指揮者が来て、時間では一時間くらいだったろうか、私たちのラーゲルの全員を集めて演説をした。

日本の軍隊は敗戦と同時に軍の組織は解体され、階級制は無くなっているはずである。

タシケント方面では半年前から軍隊を解体して民主組織を作っている。

また、現在ソ連にいる日本軍はほとんどそのよ

うに変わっている。今後のラーゲルの運営等一切の行事はソ連側の指示でなく日本側の自主的革命であるからとまたソ連側は歓迎していた。

そして作業場への警戒兵もつけず、自主的に日本軍の責任を持つて行うことになった。

その後気分的にも余裕ができ、またノルマの達成も上昇し、給与も次第に良くなった。

ダモイ

昭和二十三年七月何日だったか、作業中に突然ダモイ（帰還）命令が出た。

「ヤポンスキーサルダート、ラボーターカンチャイ、ザクトラ、トウキョウダモイ、オーチンハラシヨ」。日本兵、仕事は終わった、明日は東京へ帰れる、最高に嬉しいだろうと叫んでくれた。ソ連歩哨も満面の笑みだった。

この祝報を聞いた私たち一同は飛び上がって喜んだ。

六月の終わりごろよりダモイ（帰国）はもう近いとうわさは聞いていたが、現実切手を手にした

喜びは感ひとしおであった。

帰還列車

アングレン収容所を後に帰還列車は黒煙を上げ、東部シベリアの本線ソ満国境沿いを一路東へと進んでいる。ブラゴエの雑木林の風景は三年前入ソした当時を思い出させる。

何両目の編成だったか赤いはたを振りながら赤旗の歌をうたっていた。

民主の旗赤旗は 我等の頭上をなびく

高く立て赤旗を その影に生死せん

労働者農民は 共産党をまもる

列車は時折主要駅の構内に入り食糧や燃料を補充した。

時速五〇キロないし六〇キロくらいで東進している。そしてウスリー河の沿線を進行中だけれが「この河の向こうが満州だ」と叫んだ。

私たちの青春、第二の故郷の思い出もはかなき夢となつて去つて行く、感無量だ。再び訪れることもなかるうと思えば寂しい。でもその反面、一

歩ずつ内地に近づくと思えばまた楽しい。

シベリアの七月の盛夏、日中は格別に暑いが車上では涼しい風を受けた。夜は月やお星さまを小窓から眺め、各自故郷をしのぶ雑談で暮れていた。もうすぐハバロフスクだ、後三日ほどでナホトカに着くと聞いた。長い長い汽車の旅でも皆元気がだった。

ナホトカ

港の東側が砂浜で、そこに大型天幕が三十棟ほど建っていた。真夏の直射日光は暑いが、天幕の中は海風が吹き抜け涼しい、長い貨車の旅をいやしてくれる。水平線上に船影が見えた。マスト高く日の丸の旗がなびく、これが信濃丸であった。

乗船

八月十三日夕方ナホトカ出港、八月の日本海は思ったより穏やかだった。

八月十六日朝、東方に小さな島が見えるぞと甲板上で叫ぶ者がいた。すると我も我もと甲板上に出た。見える、見える、海面上に日本列島の面

影。緑の樹木に包まれた美しい光景である。懐かしい祖国の島を今目前にしたとき感涙むせぶ思いだった。肩をたたきあって喜ぶ者、嬉しい涙でほおをぬらしている者、人さまざまであった。

船の進行によってその島が右にまたは左に変わって見える。いよいよ舞鶴港内に入って来た、はつきりと見える松の枝や小島に寄せる白い波の華、日本の自然の風景は美しい。

あなたの島にぼつんと草葺き屋根の家が見える。ああ本当に日本の国だ、日の丸の旗が立っている、ここは舞鶴の港だ。待ちに待った祖国、今やっと帰って来たんだと思つたとき、急に目頭が熱くなってきた。そして次第に潤んでくる忘却する事のできない感激である。

船より降りた。栈橋を一步また一步と進む。白いエプロン姿に日の丸の旗を片手に持つて「長い間ご苦労様でした」と頭を下げたて迎えてくれる。嬉しい、本当に嬉しい、まるで夢のようである。

生還のよろこび

引揚援護局の指示に従つて検疫や身の回りの品から全身にDDTを散布され、次に大浴場で命の洗濯。一度に何百人も入れる豪華さ、心身共に休められた。まるで極楽浄土に生まれたような思いでした。

悔しい思い

乗船直前まで長らく隠し持っていた戦友や同志の形見の写真、そして住所録等は、厳しいソ連の検査で没収または焼却してしまった。次に乗船して忘れないうちにと書いたメモ帳も、今度は下船時、米軍の服装検査があると聞いて、今のうちに海に捨ててしまった。もう頭の記憶に頼るしかなかったが、これは月日のたつに従つて忘れていく。収容所で別れた者、あるいは病死した者、そして転送者等、知る限り帰郷前夜にその日買ったばかりの雑記帳（ノート）に記入した。それは今でも手元にある。

四年ぶりの帰宅

八月十九日晴天の朝、信濃丸の乗船者二〇〇〇人のお別れである。駅の構内は右に左に上り線、下り線それぞれ懐かしい我が古里へと舞鶴を後に「身体を大切になあ」「元気での中」「便りをくれよ」「またあおうぜ」互いに叫びあつて別れた。私は舞鶴駅より鈍行で敦賀に出て、ここで富山行きに乗り換えて、四年ぶり武生駅に降りた。

帰国後

一部配給制度はありましたが、田舎だからあらゆる方面に恵まれ、食事でも毎食白米飯をいただき、感謝にたえません。ただし徴用期間を含めて六カ年の空白で、当時の生活に戻るまでには一カ年以上も要したように思いました。でもシベリアの苦勞を思えばどんなことでもやれると思ひ頑張ってきました。

最後に、戦争そして抑留中に無念にも帰国できず亡くなられた数多くの同胞には、心から哀悼の意を捧げ、御冥福をお祈り申し上げます。

【執筆者の紹介】

石川氏の経歴は本文記載のとおりです。

アングレン炭鉱とはソ連の一番奥地です。土地はウズベキスタン首都タシケントのもう一つ奥でした。約八〇〇〇人日本兵隊が収容されていました。私はこの作業第四大隊に所属していました。後で分かったのですが、同じ故郷の今立町から第六大隊に石川君と白崎君がいた。大隊は違っても同じ作業現場だから偶然会うことができた。

「やあ石川君じゃないか」「あれ、佐々木君久しぶり」そして話は短時間だったが、遠く離れた異国の土地で同郷者に会えることはとてもうれしい、また心強い感じだった。そして「少しでも先に帰った者が留守家族に安否を知らせよう」と口約をした。

結果的には石川氏は私より一足先に帰っていた。思えばアングレン炭鉱で同じ苦勞をした者同士、石川君そして白崎君とは血縁以上の堅いきずなで結ばれています。

昭和五十五年の春、全抑協鯖江支部が結成され、引き続き今立支部が結成いたしました。このとき本部より西村副会長さんと渡辺事務局長さんのお二人が花を添えて御出席下さいました。石川君そして白崎君も一所懸命協力してくれました。

おかげで七十五人全員が入会して当時は盛大だったが、年波（大正生まれ）には勝てず、今は約半数くらいです。でも皆互いに助け合っています。私もアングレン炭鉱で同じく苦勞した石川氏を紹介しました。

（福井県 佐々木 清左夫）

色丹島からシベリアへ

福井県 豊田 武夫

第一回目の召集は昭和十七（一九四二）年四月十日、敦賀第三十六部隊に入営三カ月の教育召集を受け、帰宅後は出征兵士の家（普れの家）の奉

仕を一カ月間に四回は手伝いに行きました。それが十七年八月より十九年の召集まで続きました。

二回目の召集は昭和十九年七月三日午後、役場から来て小さい子供に大切な赤紙（召集令状）を渡して帰りました。夕方役場に行き、小さい子供に大切な赤紙を渡してと叱りに行きますと、「悪かった、どうかご勘弁願います」と（留守番の妹は七歳くらいでした）。

第二回目の召集では、敦賀第三十六部隊の雪中演習場で七日間くらい訓練し、夜中に大命が下り出発。気比神宮に参拝し、四時発の軍用列車（窓のヨロイ戸を閉め）で出発、品川駅で昼食、車内で宮城遙拜。一路青森に向けて出発、青函連絡船にて函館に到着、根室までの沿線各駅で国防婦人会の方々のお茶、バレイシヨ等の接待を受け感謝でいっぱいでした。

兵器受領ができず市内の寺院（耕雲寺）に七日くらい滞在、夜十時五トンぐらいの漁船で色丹島に上陸、島民たちは上機嫌で迎えてくれた。島民